

## 新刊紹介

シルクロード学研究センター

### 『シルクロード学研究16 カシュガル地方の伝統的生産と生活文化』

シルクロード学研究センター 2003年 197ページ

河合 隼太

本書は中央アジアの中心地パミール高原に位置するカシュガル地方、ホタン地方を対象とした「カシュガル地方の伝統的生産と生活用具—シルクロードを通じる移転・受容・開発の史的展開—」と題されて、2000年と2001年に行われた現地調査の報告書である。

調査チームは西アジアの農村社会、伝統技術などを専門とする原隆一氏、南アジアの農村経済史を専門とする多田博一氏、東アジアの社会経済史を専門とする新納豊氏、それに、東南アジアの民族音楽を専門とする風間純子氏の学際的メンバーから編成されている。

西域南道と西域北道が交差する東西交通の要衝であったカシュガル地方は東西の大文化圏の結節点でもあった。この地域はシルクロードを通じて外部から流入してくる文化の影響を受けながらも、地域に内在する複雑な地理条件、厳しい自然条件、多様な生態資源によって、オアシス農民、遊牧民、都市民などの異なる生活形態を生みだし、彼らは相互に関係性を持ち、長い時の中で自然環境への適応という形で独自に固有の文化を熟成させていった。

調査チームは自然生態環境、在来技術、その諸集団の関係性を強く意識している。オアシス群であるカシュガル地方において自然環境の中で生きる人間の生活の基盤となっている水利ネットワークと、その上で情報や物品の流通、交換が行われている定期市に着目し、

これらが文化形成に深く関与しているとする。地域の自然環境が強く影響している伝統的生産、生活用具、生活文化から、地域内部で形成された暮らしの実態とそこに展開されている社会システムを実証的に解明していく。調査報告はカラー写真、イラスト、年表、図表、楽譜、ビデオ（本書内には目録）などの多様なメディアをふんだんに利用し客観性の保持に努めている。

調査内容はオアシス農村のウイグル族の生産に関わる水車、製粉機、農具、生活用具であるフェルト、氷室、農業生産などやカシュガル、ホタン、バクチュエの定期市の事例からは内部で扱われる商品や性格の特徴、相違について、さらに、ウイグル族のアイデンティティの一要素でもある伝統的音楽におよぶ広範で詳細な報告がなされている。

このような地道に遺跡を発掘するがごとき調査は、否応なく押し寄せる近代の波によって滅び行く民族固有の有形・無形の伝統に光を当て、人類の知的財産を後世に伝えるものである。また、地域に根ざした文化に対する深い理解は、シルクロードを巡る東西文化の交渉過程をより具体的に再構築するという広がりを持っており、この点は見逃すことのできない本研究の高い学術的な意義といえる。

本書の構成は以下の通りである。

序にかえて

第一部 調査記録編

2000年度夏ウイグル調査日誌

2001年度夏ウイグル調査日誌

第二部 本文編

序章 調査の概況

第一章 ウイグル族の農業と農村生活

第二章 カシュガル、ホタンの定期市

第三章 ウイグル族の伝統的生産と職人

第四章 ウイグル族の伝統的音楽－音楽・楽器・職人

第三部 付録リスト編

2000年度調査ビデオ記録目録

2001年度調査ビデオ記録目録

研究者一覧

Summary

Contents

調査日誌は詳細に道程と調査団の行動を伝えている。以下、各章ごとの内容について紹介していく。

第一章 ウイグル族の農業と農村生活

ウイグル族の食を軸とした調査報告である。本章の執筆者である多田氏は、農業、加工、調理、食事を主とする伝統的生活様式に関して2001年に行った現地調査と19世紀後半にイギリス人が残した記録とを比較して歴史的な変化について言及している。

現地調査はカシュガル地方のオアシス農村で行なわれた。報告内容は自給自足的なこの地域の農業生産に関する、品種、播種期、作付け面積、灌漑技術、肥料、農具から調理方法や加工、製粉、精米方法と道具、コムギやトウモロコシの起源や伝来方法などに及ぶ。伝統的製粉方法、伝統的朶摺り、水車、精米機、横型製粉水車石臼、電気石臼製粉機など

を通してウイグル族の暮らしを解明する。

オアシス地帯の豊富な水量は水路近くの水車を使った水車精米、製粉に使われている。ホタン地区の土壌は砂地であり、日干しレンガ造りに適していないことから木と泥で家が作られていることなどを自然環境との関係から論考する。また、手と箸が融合した食事作法から中国とイスラームの影響を、調理方法から中国文化圏の影響を示唆する。

生命維持と人生の楽しみでもある食事は、合理的な理由とともに、偽りなく民衆たちがよりおいしいものを追求した結果であろう。研究者として学術的な資料を提供するとともに、民衆の生活を現地の農民の視点にたつて観察することも忘れていない。

第二章 カシュガル、ホタンの定期市

本章の執筆者である新納氏は、定期市を「暮らしの技術」展示場であり、ウイグル族の暮らしを推し量るには最適な場であるとする。定期市は経済的な流通と、付近住民の娯楽、情報交換の場として複合的な機能を持つとされる。

同氏はまた、近代化は歴史と風土に育まれた文化的個性との混交なしには浸透していかないという見解を表明している。そして、地域内部の遊牧民と農民との関係、農民同士の関係、異なる民族間での交易など諸集団のネットワークや機能について東アジアと比較し地域的特性に関する示唆を加えている。

調査はカシュガル日曜日、ホタン日曜日、バクチェ火曜市の3つの異なる地域の定期市で行っている。カシュガル日曜日について1995年次の調査との比較から、西部大開発による鉄道の開通によって街が様変わりしている様相を伝える。また、家畜市の観察が詳しく記述され興味深い。

ホタン日曜市からはオアシスにおける農業が東アジアの農業とは異なり高い商業的性格と農家間で社会的分業が行われている可能性について言及している。

バクチェ火曜市では鍛冶屋、ブリキ細工、木工職人などの職人兼商人、家畜用具、履き物、革製品の修理など職人についての観察が行われている。

### 第三章 ウイグル族の伝統的生産と職人

カシュガル地方やホタン地方は、沙漠の南縁に位置する極乾燥の地であり、同時に山脈と河川が作る緑豊かなオアシスという、相異なる環境が併存する地でもある。その自然、生態資源にうまく適応して衣食住などの生活技術を発展させてきた経緯をふまえ、本章の執筆者である原氏は、ウイグル族の伝統的生産技術や道具など、この地域の生活様式と自然生態環境が深い関係性を持っていることを強く意識する。

フェルト、米搗き水車、縦軸横型製粉水車、畜力搾油機、手漉き紙、氷室、アイスクリームなどの冷菓についてその起源や広がりについて併せて紹介している。フェルトは古くから沙漠と山岳の厳しい自然に対し、牧畜民の生み出した伝統的生産技術による日常生活品のひとつであった。また、コムギ文化圏でありながら米の名産地であるカシュガル、ホタンなどの米搗き水車をはじめ、縦軸横型製粉水車、畜力搾油機などの調査チームが探し求めてきた伝統的生産、生活用具の3点セットについて記録している。

木工や搾油、手漉き紙、木の家はオアシスにみられる多種の樹木といった生態資源が関係していることを具体的に明らかにする。また、中央アジア、西アジア圏では食品の保存技術として古くから冷蔵技術が発展していた

ことを専門の西アジア文化圏と比較し、考察を加えている。

### 第四章 ウイグル族の伝統音楽 —音楽・楽器・職人—

本章の執筆者である風間氏は現地調査を通じて、楽器商、音楽愛好家、歌舞団、音楽家たちの活動を中心に観察を行い、現代におけるウイグル族の実情を報告している。ウイグル族の音楽に関する記録や研究調査は非常に少ないが、その理由を同氏は、西アジア・中央アジア文化圏にありながら、中国領土の内に位置する「あいまいさ」により、ウイグル族の音楽が西アジア・中央アジア文化圏に分類され、「亜流」と考えられる傾向にあったと指摘する。本調査の目的はウイグル族によって形成された独自の音楽文化を探求しようとするところにある。ウイグルの音楽を分類し、特にムカムといわれる伝統音楽一般に関する観察が中心となっている。ムカムの音楽構造、リズム構造、旋律、音階構造を楽譜に記録し分析を加えている。

また、楽器に関する調査ではギジユクという楽器の内部に近年改良が加えられていることに注目する。音楽家や音楽・舞踊の上演状況、楽器商人、音楽関連機関に関して現地での覚え書きもされている。音楽がウイグル族の価値観、生活慣習に密着しており、音楽の果たす役割の重要性と豊かな音楽環境から今後ウイグル音楽の伝統性は保持されていく可能性が高いと結論する。

昨今の世界的な風潮としてアメリカを中心にした一極へと収斂していくグローバル化の傾向と、これに対抗する形での地域主義の台頭が起こっている。新疆ウイグル自治区内でのイスラーム独立運動にみるような地域、思

想的な集団と国民国家という枠組みが対立を先鋭化していくなかで、社会の基盤である物質文化や精神文化を具体的に観察し、地域社会の基層文化を解明することは、このような今日的課題を乗り越えていくためにもっとも重要な研究課題の一つであるといえる。本報告書はこの意味においても上質な報告書である。しかし、著書たちが告白しているように

報告内容は観察、収集の段階であり、文化的、歴史的背景への考察も十分であるとは言えない。さらに、本書における伝統と近代について明確に定義する必要もあると思われる。いづれにせよ、このような調査と理論化には膨大な時間と多くの知力と体力を必要とするものであろう。本研究の最終的な報告を望まずにはいられない。